

学校教育における美術教育の意義

西村 優子^{*1}・福田 隆眞^{*2}

On the Significance of Art Education in School

NISHIMURA Yuko^{*1}, FUKUDA Takamasa^{*2}

(Received October 21, 2024)

キーワード：美術教育、図画工作、美術、芸術、学校教育

はじめに

本稿は現代における学校教育における美術教育の意義について考察するものである。2000年以降の日本社会は様々な場面で急速な変化を遂げてきた。美術教育に係わることとしては、インターネットによる情報化社会の進展、映像化社会の拡大、2020年の新型コロナウイルスによる社会参加の変化、少子化による学校教育への影響などがある。また、社会全体としてグローバルとローカルの視点、自己表現の機会の増大と情報の氾濫などがあげられる。こうした社会の変化における学校教育における美術教育の意義と可能性について、幼稚教育、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校の美術教育について考察を試みる。

1. 幼児教育における美術教育の目的と意義

幼児教育施設において、幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものとしている。美術教育に関連する内容については、幼稚園教育要領では、生きる力の基礎を育成するために幼稚園教育の目標（学校教育法78条）の達成に向け「多様な体験を通じて豊かな感性を育て創造力を豊かにする」こととしている。（注1）また、保育所保育指針では、子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために「様々な体験を通じて豊かな感性を育て創造性の芽生えを培う」こととなっている。（注2）

幼児期の子どもたちが身の回りの自然物・人工物をみたり、触ったり、また、手を加えたりすることによって、心の中に驚きや喜びの感情が沸き上ったり造形的なものに興味を抱いたりする。このような体験を通して、子どもの中に豊かな感性が育まれていく。また、自分がつくったものや心動かされたことについて語つたことが、周囲の人（他者）に受け止められる体験を通して、子どもは表現の喜びを感じ、表現に対する主体性を高めていくとともに、安心感を得るなど人格形成の基礎を培うことができるようになっている。

2. 小学校図画工作科の目的と意義

「小学校学習指導要領 第2章 第7節 図画工作科」において、小学校図画工作科の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の色や形などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とし、育成すべき資質・能力の三本柱について次のように定めている。（注3）

- (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようとする。「知識及び技能」
- (2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想したり、作品

*1 美祢市立綾木小学校 *2 山口大学名誉教授

に対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようになる。「思考力、判断力、表現力等」

(3)つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、感性を豊かにし、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。「学びに向かう力、人間性等」

図画工作科においては、幼児期の体験を通して児童自身に備わった資質・能力（つくりだす喜びを味わうこと、見たり感じたりする力、どのような形や色にするか考える力、考えたことを実現するために用具や表し方を工夫する力、一度作ったものを改めて見て新たなものをつくりだそうとする力など）を一層伸ばすという視点である。内容としては、「造形あそび」「絵や立体」「工作」「鑑賞」である。「造形遊び」は図画工作科として特徴的な内容であり、「子供本来の生き生きした姿を取り戻すために遊び性を生かす」という設定理由から、児童が材料や場所・空間などに出会い働きかける中で目的を見付けて発展させていく活動である。「絵や立体」は心象を表現する活動であり、「工作」は機能表現あるいは適応表現と呼ばれるものである。「鑑賞」については、鑑賞の対象を身の回りの自然物・人工物や美術作品など多様なものとしているが、児童の発達段階を考慮した活動をすることになっている。様々な造形的な活動を通して、様々な造形活動自体の力を身に付けるとともに多様な資質・能力を身に付け、創造活動に喜びを感じるとともに美術文化について理解を深めることができるようになっている。

3. 中学校美術科の目的と意義

「中学校学習指導要領 第2章 第6節 美術」において、中学校美術科の目標は「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とし、育成を目指す資質・能力の三本柱それぞれについて次のように定めている。（注4）

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようになる。「知識及び技能」

(2) 創造的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようになる。

「思考力、判断力、表現力等」

(3) 美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。「学びに向かう力、人間性等」

内容としては、「絵や立体」「デザイン・工芸」「鑑賞」である。小学校図画工作科における「工作」が中学校美術科においては「デザイン・工芸」として位置づけられている。「工作」「デザイン・工芸」とともに造形の「実用性」がその特徴であるが、図画工作科においては「用途を考えながら、どのように主題を表すかについて考えること」となっているが、中学校美術科においては「使う目的や条件などを基に、使用者の立場、社会との関り、使いやすさや機能と美しさなどの調和を総合的に考える」となっている。表現の対象が他者や社会へ広がるとともに、実用性（用）も美しさ（美）を兼ね備えることについて目を向けるようになっている。また、「鑑賞」においては、他国の美術文化や我が国の伝統的な文化について理解を深める活動を行うようになっている。中学校美術科では、様々な造形的な活動を通して、それぞれの造形活動自体の力を高めていくとともに、他者理解や社会性など多様な資質・能力を身に付け、視野を広げ、人間性を豊かにしていくことができるようになっている。

4. 高等学校芸術科における美術と工芸

4-1 「芸術科」における美術と工芸

高等学校学習指導要領において美術に関連する主な教科は2つである。ひとつは「各教科に共通する必履修教科・科目（全ての生徒に履修させる教科・科目）」における「芸術科」である。科目として「美術」と「工芸」が設けられている（他に「音楽」「書道」がある）。もうひとつは「専門学科（専門教育を主とする学科）において開設される各教科・科目」における「美術科」である。（注5）

4－2 「芸術科」における美術と工芸の目的と意義

前述の「高等学校学習指導要領 第2章 第7節 芸術」において「美術」及び「工芸」には、それぞれ「美術Ⅰ」「美術Ⅱ」「美術Ⅲ」、「工芸Ⅰ」「工芸Ⅱ」「工芸Ⅲ」の科目が設けられている。「Ⅰを付した科目」はいずれも高等学校における最初の段階の科目とされ、中学校の学習を基礎に表現と鑑賞両活動について幅広い学習をし、創造的な芸術に関する資質・能力を伸ばすものである。(表1)「Ⅱを付した科目」及び「Ⅲを付した科目」は、「Ⅰを付した科目」の履修後、生徒が発展的な学習をするものである。

表1 高等学校学習指導要領「芸術科」における「美術Ⅰ」と「工芸Ⅰ」の目標

芸 術 科	目標	芸術の幅広い活動を通して、各科目における見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
	「知識及び技能」	(1) 芸術に関する各科目の特質について理解するとともに、意図に基づいて表現するための技能を身に付けるようにする。
	「思考力、判断力、表現力等」	(2) 創造的な表現を工夫したり、芸術のよさや美しさを深く味わったりすることができるようになる。
	「学びに向かう力、人間性等」	(3) 生涯にわたり芸術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。
美 術 Ⅰ	目標	美術の幅広い創造活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、美的体験を重ね、生活や社会の中の美術や美術文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
	「知識及び技能」	(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解を深めるとともに、意図に応じて表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようになる。
	「思考力、判断力、表現力等」	(2) 造形的なよさや美しさ、表現の意図と創意工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生成し創造的に発想し構想を練ったり、価値意識をもって美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようになる。
	「学びに向かう力、人間性等」	(3) 主体的に美術の幅広い創造活動に取り組み、生涯にわたり美術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、美術文化に親しみ、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う。
工 芸 Ⅰ	目標	工芸の幅広い創造活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、美的体験を重ね、生活や社会の中の工芸や工芸の伝統と文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
	「知識及び技能」	(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解を深めるとともに、意図に応じて制作方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようになる。
	「思考力、判断力、表現力等」	(2) 造形的なよさや美しさ、表現の意図と創意工夫、工芸の働きなどについて考え、思いや願いなどから心豊かに発想し構想を練ったり、価値意識をもって工芸や工芸の伝統と文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようになる。
	「学びに向かう力、人間性等」	(3) 主体的に工芸の幅広い創造活動に取り組み、生涯にわたり工芸を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、工芸の伝統と文化に親しみ、生活や社会を心豊かにするために工夫する態度を養う。

内容については、「美術」「工芸」とも領域を「A表現」「B鑑賞」とし、以下のような特徴がある。

美術科では、「A表現」の項目として「映像メディア表現」が設けられ、感じ取ったことや考えたこと、目的や機能などを基に、映像メディアの特性を生かして主題を生成すること、映像表現の視覚的な要素の働きについて考えることなどを通して構想を練ったり、機器等の用具の特性を生かしたりしながら表現方法を工夫し、表現意図を効果的に表すといった資質・能力の育成をめざしている。映像メディアについては急速に発達している。只中にいる生徒にとって、映像メディアを制作するという体験や鑑賞の対象として冷静にみつめる体験は、映像メディアや情報の発信者及び受信者として適切な姿勢を意識させることも期待できる。

工芸科においては、「A表現」の項目は「身近な生活と工芸」「社会と工芸」の2つの内容となっている。「身近な生活と工芸」は、身近な生活の視点に立って、自己の思いなどから発想や構想し、用途と美しさ（用と美）の調和を考えて創意工夫する資質・能力の育成をめざしている。「社会と工芸」は、社会的な視点に立って、使う人の願いや心情、場などから発想や構想し、使用する人に求められる機能と美しさの調和を考えて創意工夫する資質・能力の育成をめざしている。自分の身近な生活や思いという視点と社会的な視点、双方の視点をもつことで今日的な社会の課題解決や豊かな生活や人生に向けて重要な資質・能力の育成をはかることが可能である。

5. 義務教育学校

2016年に文科省は義務教育学校の設立を決定し、現在、国公私立で207校となっている（2023年）。小学校6年間と中学校3年間を一貫して9年間で教育課程を計画するもので、単純に小学校と中学校を繋いだ学校

ではない。教員組織も9年間で計画するので、美術で考えると美術科の教員が小学校の図画工作科の授業も担当することができる。そのことによって美術の教員養成は図画工作と美術科、さらには工作の基盤となる技術的内容を統合した内容を視野に入れる必要がある。

美術教育の教育課程を考える場合、前述の小学校図画工作科と中学校美術科の両科目を統合して、発達段階に応じた教材の内容を想定することができる。そのことが義務教育学校の特長の一つである。また、教材の実施によっては、縦割りのチームを編成し、小学校1年生から中学校3年生までが一つのチームとなって、問題解決学習をしたり、総合的な活動による共同制作を行ったりすることが可能である。

6. 美術教育と教材例

6-1 和菓子のデザイン（表現を主とした実践 中学校第1学年）

6-1-1 目標及び評価規準

前述の中学校美術科の目標の実現に向け、第1学年においては目標を次のように定められている。

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、意図に応じて表現方法を工夫して表すことができるようとする。「知識及び技能」

(2) 自然の造形や美術作品などの造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、機能性と洗練された美しさとの調和、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を広げたりすることができるようとする。「思考力、判断力、表現力等」

(3) 楽しく美術の活動に取り組み創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を培い、心豊かな生活を創造していく態度を養う。「学びに向かう力、人間性等」

上記の学年目標の達成に向け、本実践においては表現活動を主とするが、よりよい表現ために鑑賞活動も取り入れ、以下のような内容を学習の主なものとして「内容のまとまりごとの評価規準」（表2）及び「題材の評価規準」（表3）を設定し、実践に臨んだ。

表2 「和菓子のデザイン」の題材と関連する「内容のまとまりごとの評価規準」

「知識・技能」	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
<ul style="list-style-type: none"> 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解している。 〔共通事項〕(1)ア 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。 〔共通事項〕(1)イ 材料や用具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。 第1学年「表現」(2)ア(ア) 	<ul style="list-style-type: none"> 伝える目的や条件などを基に、伝える相手や内容などから主題を生み出し、分かりやすさと美しさなどの調和を考え、表現の構想を練っている。 第1学年「表現」(1)イ(イ) 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図の工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。 第1学年「鑑賞」(1)ア(ア) 	<ul style="list-style-type: none"> 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく作品や美術文化などの鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。

表3 「和菓子のデザイン」の「題材の評価規準」

「知識・技能」	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
知 形や色彩、材料、光などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、作品の主題などを全体のイメージで捉えることを理解している。	発 和菓子を贈る相手や伝えたい気持ちなどを基に主題を生み出し、分かりやすさと美しさなどの調和を考え、表現の構想を練っている。	態表 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく和菓子のデザインの構想を練り、材料や道具を生かして表したりする表現の学習活動に取り組もうとしている。
技 材料や用具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。	鑑 和菓子のデザインの造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく和菓子のデザインの造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図や工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

6-1-2 学習の実際

1) 和菓子のデザインの鑑賞

単元の導入で生徒の和菓子への関心を高めるとともに、和菓子の色、形、材料、つくり方など造形的な事柄や和菓子のテーマ（季節の風物を表していること）について学習する時間を設けた。

まず、18枚の和菓子カードを3・4名の各班に配り、自分たちで方法を決めてグループ分けをさせた。（図1）結果を大型モニターで共有しながらグループ分けの視点を確認した。視点として、モチーフ（花、果物、動物等）、材料（あんこ、寒天）、作り方（丸める、包む、型を使う等）が挙がった。季節（四季）の意見が出されたところで、和菓子に季節の表現があることを確認した。さらに、きんとんで紅葉の山を表現した和菓子や春の京都の町を主に色で表現した和菓子を提示し、風景や雰囲気を端的に表した和菓子のデザインがあることに気付かせた。

2) 制作条件の確認と各自のテーマを考える

季節がテーマとなっている理由について考えさせ、和菓子のコンセプトとして相手に対する思いやりがあることを確認した。その後、制作の条件として誰かを幸せにするもの、季節をテーマとすることを提示し、各自のアイデアを考えさせた。感染症の影響で会えていない友人、日々忙しそうな父母、受験を控える姉、とても可愛がってくれたが亡くなってしまった祖母に向けたアイデアがあった。

3) 制作に向けての構想を練る

贈る人、季節やモチーフが決まった後、具体的なデザインに入った。各自のデザインに入る前にポイントとして単純化や強調の確認をした。数点の作品例を提示し、単純化や強調によってイメージを表すことができることを確認した。単元の導入時に生徒から挙がった作り方（丸める、包む、型を使うなど）も振り返らせ、アイデasketを描き、使用する材料や道具についても構想を練らせた。

4) 材料や用具を生かして表す

和菓子制作用の粘土の種類は数種類発売されている。滑らかでも水を使うと乾燥後ひびが入りやすいものやプラスチック粘土によっては網などでこす「きんとん」ができないものもある。粘土については、学習計画に合わせてある程度選んでおく必要がある。本実践では、和菓子の餡としてプラスチック粘土、寒天としてレジンを使用した。その他、ビーズやセロファン、型などについては教師が用意したり生徒がアイデアに合わせて持参したりした。制作中にアイデアが変化していくこともあった。（図2）

5) 銘を考え、贈るための準備をする。

銘当てクイズから銘も和菓子で味わうものの一つであることを確認した後、自分の作品の銘を考えさせた。作品は壊れにくく、みやすくするためケースに入れた。お互いが鑑賞したり参観日に保護者が鑑賞したりするために、学級前に展示した。通りがかった生徒や教職員等も鑑賞を楽しみ、制作した生徒自身も嬉しそうであった。（図3・4）

6) 学習の振り返り（制作の手応えを確かめる）

学習の振り返りとして、つくった作品を贈る際に、受け取った相手から感想をもらって来る活動を仕組んだ。以下のような感想から、生徒は制作の手応えを感じるとともに、デザインのコンセプトの大切さを実感したり制作への新たな意欲を沸かせたりすることができたようであった。

【和菓子をもらった感想、感想を読んでの生徒の振り返り】

和菓子をもらった感想	感想を読んだ後の生徒の振り返り
・線香花火をモチーフに作っていて、以前九州に里帰りした時にみんなで花火をしたことを思い出しました。夏の夜を想起させる青で涼しげで夏にぴったりの和菓子ができたと思います。（母より）	・線香花火をモチーフに世界で1つの和菓子をつくることができたので良かった。作品は失敗してしまった所があるので課題です。「誰かのために」コンセプトを決めて作品を制作するとより感じのこもったものになるのだと分かりました。（満足度 80%）
・ぼくの一番好きなくだものみかんを作ってくれてありがとう。みかんの色がとてもきれいでいい香りがしそうでとても HAPPY になりました。（弟より）	・今回は粘土だけの作品でしたが、レジンなどを使ってまた、作品にしたいと思いました。（満足度 85%）
・「雪みかん」という和菓子名が、和菓子らしい季節感を感じられますね。雪は粉砂糖でナイシング、みかんの皮は果汁の酸味を使う、中は白あんでしょうか。実際にあれば、賞味させていただきたいです。お供の雪だるまもかわいらしいですね。（祖父より）	・あまり作品としては上手とはいえなかったかもしれないけれど、頑張って作って、祖父母に喜んでもらえたのでよかったです。不器用でも一生懸命作りたいなと思いました。（満足度 80%）

6-1-3 成果と課題

制作した作品で大切な人を喜ばせたという実感は何よりの成果であった。また、デザインにおけるコンセプトやわかりやすくかつ美しく表すことの大切さに気付くことができた。今後の課題としては、さらに美しく表すことができるよう形や色などバランスについて学びを深めていく必要があると感じた。

6-1-4 教材の展開例

本実践は、中学1年生の生徒が大切な人に贈るための和菓子のデザインの制作であったが、次のような発展的な活動も可能である。

＜小学校における実践＞

図画工作科においてデザインはないが、お菓子をつくるという題材があることから、和菓子のデザインを鑑賞し、粘土等を使って和菓子をつくる活動を試みた。5・6年生も和菓子のテーマに季節（四季）があることに気付くことができ、自分で言えば季節に合わせてこのような和菓子をつくってみたいと構想を練り、制作することができた。単純化や強調についても作品例を比較して見せることによって、気付き理解することができたようであった。中学生との違いは、強いて言えば具象に憧れる傾向があり、予定では単純化できていたものが粘土を手にしたとたん、つくり込み過ぎてしまいやすいことであった。（図5）

＜和菓子に合わせた皿のデザイン＞

和菓子を提供する店や茶会において、和菓子をのせる皿は厳選されている。和菓子のテーマに合わせたものが選ばれている。和菓子の鑑賞と共に皿のデザインを考える学習も可能である。（図6）

＜テーマを季節以外のものに定めたデザイン＞

相手を喜ばせるという条件は変えず、季節以外のテーマでデザインさせることも可能である。作品例は学園祭のテーマが国際に、和菓子のテーマを国としてデザインを考えた例である。コンセプト、テーマ、モチーフについて整理しておけば、様々なテーマで和菓子のデザインを考えることが可能である。（図7）

＜学園祭やオープンスクールにおける活動＞

美術科の授業で和菓子のデザインを体験した生徒たちが、学園祭やオープンスクールの企画で来校者に和菓子のデザインをさせたいという意見が挙がった。実際に生徒が材料や作り方の参考プリントを作成し、当日は生徒が指導者となって来校者に説明したりや体験させたりしていた。（図8）

＜家庭科とのコラボレーション＞

中学校の「技術・家庭科家庭」家庭分野における「食生活」の内容に幼児のおやつや伝統食がある。（注6）菓子という接点からデザインを美術科で考え、調理を家庭科で行うことも可能である。図10・11はデザインした和菓子を調理実習で作った例である。餡や寒天などでできた和菓子の美しさを感じることができた。また、粘土より柔らかく扱いにくい餡は細部を作るには限界があり、おのずと単純化が進み洗練された形に仕上がった。材料（素材）が形を誇うことを実感し、授業づくりにおける材料の大切さを改めて感じた。

＜地域と連携した活動＞

近年、学校では地域との連携教育が進められている。和菓子のデザインづくりは地域との連携において非常に有効である。児童・生徒だけでなく地域住民にとって、日本の伝統的な和菓子の造形的な美しさ、季節の風物に美しさを見出す日本の伝統的な感性、単純化や強調でイメージを伝える工夫、地域のよさや美しさなどに改めて気付くことができる。また、交流においても様々な活動が考えられる。（図9・12）



図1 和菓子のデザインの分類をする



図2 構想を練った後、制作



図3 「夏の夜」親を元気に



図4 学級の近くでの展示会

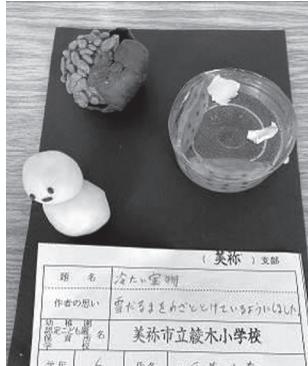


図5 小学生の作品



図6 和菓子(紅葉)に合わせた中秋の名月の皿



図7 「桜咲くチマチョゴリ」



図8 来客者に説明する生徒



図9 地域とつくる「ふれあい山口」199号

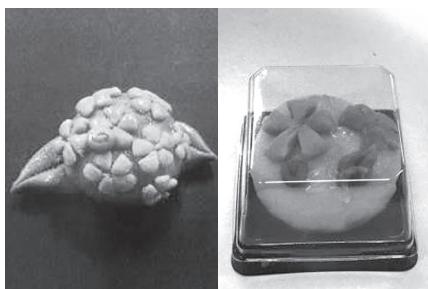


図10 デザインと実物(単純化が進む)



図11 調理実習でつくる



図12 地域の方をもてなす
「瀬戸内タイムス」2016.2.19号

6-2 なりきって鳥獣戯画（鑑賞を主とした実践 中学校第2学年）

6-2-1 目標及び評価規準

前述の中学校美術科の目標の実現に向け、第2学年及び第3学年の目標を次のように定められている。

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、意図に応じて自分の表現方法を追求し、創造的に表すことができるようとする。「知識及び技能」

(2) 自然の造形や美術作品などの造形的なよさや美しさ、表現の意図と創造的な工夫、機能性と洗練された美しさとの調和、美術の働きなどについて独創的・総合的に考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようとする。「思考力、判断力、表現力等」

(3) 主体的に美術の活動に取り組み創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を深め、心豊かな生活を創造していく態度を養う。「学びに向かう力、人間性等」

上記の学年目標の達成に向け、本実践においては表現活動を主とするとともに、よりよい表現ため活動も

取り入れ、以下のような内容を学習の主なものとして「内容のまとまりごとの評価規準」(表4)及び「題材の評価規準」(表5)を設定した後、実践に臨んだ。

表4 「なりきって鳥獣戯画」の題材と関連する「内容のまとまりごとの評価規準」

「知識・技能」	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
<ul style="list-style-type: none"> 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解している。 〔共通事項〕(1)ア 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。 〔共通事項〕(1)イ 材料や用具を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求して創造的に表している。 第2・3学年「表現」(2)ア(ア) 	<ul style="list-style-type: none"> 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。 第2・3学年「鑑賞」(1)イ(ア) 対象や事象を深く見つめ感じ取ったことや考えたこと、夢、想像や感情などの心の世界などを基に主題を生み出し、単純化や省略、強調、材料の組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。 第2・3学年「表現」(1)ア(ア) 	<ul style="list-style-type: none"> 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく作品や美術文化などの鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。

表5 「なりきって鳥獣戯画」の「題材の評価規準」

「知識・技能」	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
<p>知 形や色彩、材料、光などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、作品の主題などを全体のイメージで捉えることを理解している。</p> <p>技 材料や用具を生かし、意図に応じて表現方法を追求して創造的に表している。</p>	<p>鑑 『鳥獣戯画』の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。</p> <p>発 「断簡」を深く見つめ感じ取ったことや考えたこと、想像したことなどを基に主題を生み出し、材料の組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。</p>	<p>態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく『鳥獣戯画』の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に取り組もうとしている</p> <p>態表 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく「断簡」の場面の様子などを基に現代版の構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする表現の学習活動に取り組もうとしている。</p>

6-2-2 学習の実際

1)『鳥獣戯画』の特徴と学習課題（現代版『鳥獣戯画』の制作）の確認

小学校6年時の国語科「『鳥獣戯画』を読む」という説明文の教材で掲載されており、覚えている生徒も多い。絵巻物として関心を高めるため「断簡（だんかん）」（『鳥獣戯画』の一部で抜け落ちてしまった一例を提示した。『鳥獣戯画』が紙を貼り合わせた絵巻物であることを確認した後、本学習の課題は、断簡に描かれている場面を考え現代風になりきること（以下、現代版「断簡」）を作品例とともに確認した。作品例は教員の協力を得て撮影した。（図13）

2) 現代版「断簡」の構想と撮影

班員（5・6名）で「断簡」に表されている場面について意見交換をするとともに、現代版を考え、衣装や持ち物、動作や表情、背景等を準備物し撮影した。生徒同士で立ち位置やポーズ等をタブレットで確認し自分たちのイメージに近づけようとしていた。（図14）

3) 現代版「断簡」の鑑賞

制作した画像をお互い鑑賞し、「断簡」の場面のイメージやイメージをつくりだす工夫について意見を交換した。ここでのポイントは、どのようなところから自分たちの主題を導いたのか確認することである。この手だけによって、他班の作品をみる際に形等などをより注意深くみることになる。他班の作品を注意深くみながら作品に対する親近感を増していくといったようであった。（図15・16）

4) 「断簡」が入る部分を考える

今回鑑賞した「断簡」は『鳥獣戯画』のどこにはいるか確定していない。学習の終末において今一度、

『鳥獣戯画』を絵巻物としてみつめさせるため、甲巻の場面の順番を検討させた。自分達でなりきっていることもあり、衣装や持ち物、動作や表情等、様々な部分に注目していた。また、「旅」「引っ越し」「お祭り」など自分達で考えたストーリーにタイトルを付ける班などもあった。



図 13 「教師戯画」(参考資料として)



図 14 「断簡」の場面について考える



図 15 「沖縄修学旅行」(現代版の場面)



図 16 作品発表

6-2-3 成果と課題

生徒の振り返りにもあるように、著名な『鳥獣戯画』の一部「断簡」の場面について、造形的な見方や考え方を働きながら級友と共に鑑賞していくことで、想像力を広げていくことができたようである。また、作品の様々な解釈に触れることで、自分の感性で作品に向かい合い、想像力を広げて鑑賞する楽しさを改めて味わうことができたようであった。級友とともにになりきることやタブレットでの撮影や検討を通して、「断簡」の鑑賞を深めていくとともに、「断簡」の入る部分の検討を通して『鳥獣戯画』が表現することや絵巻物についての事柄を身に付けることができたようであった。

【生徒の振り返り】

- ・どのようなストーリーか、ひとりひとりの意見を生かしていくもの楽しく、想像力が働いた。
- ・一つ一つの絵から読み取れる心情をもとにストーリーを考えるのが楽しかった。
- ・小学校の国語では、一つの場面についてクラスで話し合い、どのような場面かひとつの答えを出した。美術では、それぞれの班が好きなように表現するということで、たくさんの題(テーマ)があるのか、いろいろな解釈ができるというのがすごくおもしろいと思いました。

今後の課題としては絵巻物についてより認識もたせることが必要である。本実践を通して、生徒は『鳥獣戯画』に関する事柄については多くを学ぶことができたが、古来より伝わる貴重な絵巻物を通して、文化財の保存・継承に関する事柄についても学ばせてていきたい。

6-2-4 教材の展開例

〈自分達で考えたストーリーの動画制作〉

甲巻のストーリーを動画で表現することとなり、イラストやペーパーサート等で1~2分程度の動画を作成した。制作した動画は各学級の美術科の授業(1時間)において発表した。班によっては学園祭において発表し、来校者とともに『鳥獣戯画』について楽しく考えることができた。

上記の教材例は、山口大学教育学部附属山口中学校・光中学校、光市立浅江中学校、美祢市立綾木小学校における実践である。

7.まとめ

現代社会における学校教育における美術教育の意義と可能性について、各校種の目標や内容等から考察してきた。学校教育における美術教育の特徴として発達段階に応じて教育と美術のバランスが変化していくことが挙げられる。初段階においては感覚や認知等、美術を通しての教育にウェイトが高く、中学校や高等学校になると美術自体を学ぶウェイトが高くなっている。一貫しているのは豊かな感性を育てること、創造性を育むことである。美術教育における感性とはよさや美しさなどの価値や心情を感じ取る力であり、創造活動の源でもある。現代社会はこれまでの文化の上に形づくられている。変化は激しいが、よりよい社会にしていくには、目前の対象や事象とともに伝統的な文化に価値や心情を感じ取り、貴重な文化を継承し、よりよい文化を創造していく必要がある。また、自らの人生をよりよいものにするには、生涯を通して創造的な活動や学びを継続していくことが重要である。現代社会において学校教育における美術教育では、文化の継承や新たな文化の創造と豊かな人生のための生涯学習を支える資質・能力を育成することができると考える。

付記

本稿の執筆については、はじめにを福田、1～7については西村が担当した。監修については福田と西村で行った。

注

- 1 文部科学省 「幼稚園教育要領」 2017 https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf
(最終閲覧：2024年10月17日)
- 2 厚生労働省 「保育所保育指針」 2017
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1
(最終閲覧：2024年10月17日)
- 3 文部科学省 『小学校 学習指導要領』 2017
- 4 文部科学省 『中学校 学習指導要領』 2017
- 5 文部科学省 「高等学校 学習指導要領」 2018
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf
(最終閲覧：2024年10月17日)
- 6 文部科学省 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 技術・家庭編』 2018

参考文献

- ・福田隆眞 福本謹一 『美術科教育の基礎』 建帛社 2024
- ・文部科学省 「幼稚園教育要領解説」 2018 https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf
(最終閲覧：2024年10月17日)
- ・厚生労働省 「保育所保育指針解説」 2018 https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/eb316dce-fa78-48b4-90cc-da85228387c2/f4758db1/20231013-policies-hoiku-shishin-h30-bunkatsu-1_24.pdf (最終閲覧：2024年10月17日)
- ・文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』 2024
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 図画工作】』 2020
- ・文部科学省 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編』 2018
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料

【中学校 美術】』 2020

- ・文部科学省 「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編」 2018 https://www.mext.go.jp/content/1407073_08_2.pdf（最終閲覧：2024 年 10 月 18 日）